



SENSHOJI YUKARI NEWSLETTER

1994-2023

ゆかり通信

VOL. 311

令和 5 年 12 月

北海道千歳市清水町1-14 鶴賀山 千正寺

TEL: 0123-23-2442 FAX: 0123-24-9883

ホームページ <http://sensho-ji.net/> フェイスブック @Senshoji

2023年千正寺カレンダー 12月の言葉



遅く厳寒を生き抜く

小学生までは「おどろく」ことで成長し、
高校生からは「よろこぶ」時代を過ごし、
30代からは「悲しむ」ことの大切さに気づき、
60代以降は「ありがたう」という世界を大事にする。

(五木寛之氏)

今月は作家の五木寛之さんの言葉です。五木寛之さんは、1932（昭和7）年福岡県でお生まれになり、朝鮮半島で幼少期を送り引揚げ後、早稲田大学文学部ロシア文学科入学。中退後、編集者、ルポライターを経て、1966年『さらばモスクワ愚連隊』で小説現代新人賞、1967年『蒼ざめた馬を見よ』で直木賞、1976年『青春の門 筑豊篇』ほかで吉川英治文学賞を受賞。代表作に『風の王国』『親鸞』『大河の一滴』など多数の著書があります。1981年から休筆され、浄土真宗の宗門大学である京都の龍谷大学で仏教史を学ばれ、その後は仏教や浄土思想に関心を寄せた著作を多く書かれています。

我が家にも五木さんの本がありますが、その中に2004年に放送されたNHK人間講座「いまを生きるちから」で書かれた五木さんのテキストがあります。その表紙には『自然や他者とのつながりを大切にする日本古来の感性や生き方が命の軽さと不安に包まれた現代人に「生きる力」を与えてくれるのではないかな。いま、この苦難の時代をどう生きるかを考えていく。』とありました。読むと終始、私たちの祖先がはぐくんでいた和の魂。信仰心や共生感覚、寛容の心の大切さを語られていました。

また仏教の慈悲の心にも触れられ、「他人の苦しみを自分のことのように感じるということでしょうか。共感、共苦、という言葉もあります。悲※（カルナー）とは、そのような感情だと思うのです。何も言わない、黙っている。ただうなずきながら相手の言葉を聞くだけ。そして一緒に大きなため息をつき、どうすることもできないおのれの無力さに思わず深いうめき声を発する、そういう無言の感情が、カルナー（悲）というものではないか。人は《慈》によって励まされると同じように、また、《悲》によって慰められるものである、と私はいつからか思うようになったのです。」と、ありました。今月の言葉の『「悲しむ」ことの大切さ』とは、このような思いだと受け止めています。

私は現在52歳。大学を卒業し仏教の道を行ってから、人に仏教を伝えなくてはいけないと語ることをばかりを大切にして、相手の思いを聞くことをおろそかにしてきました。相手の言葉を聞き、相手の心にくみ取り、『「悲しむ」ことの大切さに気づく』生活をしななければと感じております。

※「カルナー」はインドの言葉で、日本語の「悲」の語源とされています。

(文：鹿谷賢純法務員)